

セッション1

御国のストーリー

社会の中で信仰によって生きる

フィリス・クロスビー

© Phyllis Crosby 2009

御国のストーリー

目的

「御国のストーリー」は、**創造・墮落・贖い・最終的な回復**という四章にわたる福音をあらわしています。これは、私たちが住んでいる世界についてよく理解し、関わっていくために、フレームワーク(骨組み)となるものです。「御国のストーリー」を用いることで、私たちは毎日の生活で起こる様々な出来事を分析し、解釈する能力を伸ばしていくことを学んでいくようになります。

目次

はじめに	クリスチャンらしく考える枠組み
第1章	創造—世界はどのようなものであったか
第2章	墮落—罪が世界に及ぼしたもの
第3章	贖い—すべてのものを回復する
第4章	回復—私たちが持つことのできる希望
結論	

はじめに

私たちは様々な出来事、活動が絶え間なくごめく世界の中に生きています。おびたしい情報が私たちの心や精神に入り込んでいきます。インターネット、メディア、友人、同僚から耳に入る無数の情報は、私たちの意識と態度を侵食していきます。

個人の生活のあらゆる分野から来る要求とともに、私たちを取りまくさらに大きな世界で起こる様々な出来事に影響されず、自分の日々の経験をどのように意味あるものにしていくことができるのでしょうか。人間関係、仕事、倫理感、人生の意味について理解するとともに、決断を下す時に確固たるフレームワーク(骨組み)となるものを持っているのでしょうか。

福音が生活のすべてにしっかり根づく、祈る時や自転車に乗っている時から、オフィスで働いている時にも、福音が枠組みとなっていきます。けれども残念なことに、私たちの霊的な学びはしばしば日常生活に適用されているとは言えません。福音によってイエスに対する愛、倫理的な行動が形作られていたとしても、私たちを取りまく世界に関わらせることができないのです。

このセッションでは、生活のあらゆる局面を分析し理解することができるような聖書的な枠組みを提示していきます。この枠組みは、個人的成長やモラル・霊的生活について理解するのと同じくらい単純に、ビジネス、医学、建築について明らかに理解するための助けとなるでしょう。

聖書はバラバラな物語を集約した書物なのではなく、福音の枠組みを提供する一環したストーリーです。このセッションでは、この枠組みを「御国のストーリー」、あるいは、「福音」と同義語に扱っていきます。

「御国のストーリー」では、神が**創造**からずっとこの世界を支配しておられることが語られています。神に背いたことで**墮落**が世界に入り、**贖い**がもたらされ、最終的に神のご支配がたまねく行き渡る時、最終的な**回復**が訪れ、すべてのものの総決算が行われるのです。

「御国のストーリー」の第1章はすべてのものの**創造**について説明しています。そこから人類と私たちの住む世界に対して、神が元々持っておられた目的がわかります。美、善、真理、愛は創造の時点で、この世界にもたらされた素晴らしいもののいくつかです。この最初の章からわかることは、すべてのものは**あるべき姿**、形であったということです。

けれども、「御国のストーリー」は、あらゆるものが創造されたというところで終わってはいません。人類が行った悲劇的な選択によって、元々良きものとして造られたすべてのものに墮落がもたらされたのでした。生物、無生物両方の創造の秩序は罪によって歪められてしまったのでした。**墮落**と呼ばれるこのストーリーの部分は、事物が**あるべき姿**でなくなってしまう理由を示しています。たとえば、なぜ愛が自分中心のものになりうるのか、美がなぜ貶められてしまうのか、私たちは尊厳と満足を持つべきなのに、なぜ恥やフラストレーションを感じてしまうのかといったことです。第2章では、御国に反抗が入り、罪による支配が始まります。この章はこの**今ある**世界を表しています。

ストーリーがここで終わっていたなら、人類にはまったく希望はありません。けれども幸いなことに、私たちは創造の時

に元々あった姿に戻るのではなく、創造の時に意図された姿になりうる方法が示されたのでした。それは、イエス・キリストの贖いによる方法です。墮落と罪がもたらす破壊的な影響に対する手段はキリストの贖いによる以外ありません。

贖いという言葉は、支払いや買い戻しによって、所有権を回復するという意味です。贖いには身代金を払うことによって、人を救出し、解放するという意味が込められているのです。

十字架は贖いを可能にしますが、これが贖いのプロセスの始まりではありません。愛なる神は人類を贖おうと待っていたわけではありません。贖いは、人類が墮落したあとすぐに、エデンの園で始められたのでした。贖いは最初から人類の歴史の中に組み込まれていたのです。そして、神は、ご自身の民である私たちが神の回復のわざに入ることを通して、ご自身の御国を広げ続けておられるのです。第3章では、贖いは希望をもたらすものであり、なされうる姿であることが語られています。

「御国のストーリー」に終わりはありません。けれども、私たちが今知る限りは、世界の歴史はいつか完結します。その時、創造の時と同じ神の法則によって完全な回復がもたらされ、新しくされた天と地がもたらされます。オズ・ギネスは福音について「悪と苦しみは取り去られ、正義と平和がもたらされ、最後の涙はことごとく拭い去られた世界」と要約しています。この最後の章は、将来なる姿について述べています。

人生を分析する枠組みとしての「御国のストーリー」

C. S. ルイスはかつて外から暗い工具小屋の中を覗いた時の話をしたことがあります。その小屋の屋根には穴があいていて、そこから少しばかりの光が差し込んでいました。彼は光を見ましたが、驚いたことに小屋を明るく照らしていないことに気づきました。けれども、彼が小屋の中のテーブルによじ上って光でまわりを見回すと、小屋の中のものすべてがはっきりと見えました。ルイスはこの一条の光を福音になぞらえました。私たちは福音を見つめる必要があります。同時に私たちの住む世界を理解するためには、福音の光でどのように見たらよいか知る必要があります。以下に、福音の光で世界中のどんなものでも見る可以帮助我们となる枠組みが紹介されています。

あるべき(原状)、ある(現状)、なされうる(可能性)、なる(将来)という枠組みです。

四章の福音—創造、墮落、贖い、回復—は、あるべき(原状)、ある(現状)、なされうる(可能性)、なる(将来)という枠組みに関連しています。

1. **創造**: 神は創造され、良しとされた。墮落の前、世界中のすべてのもの、人々はあるべき姿であった。
2. **墮落**: 墮落の結果、罪と腐敗が創造の秩序に入り、世界は完全なものではなくなった。墮落は世界の今ある姿を表している。
3. **贖い**: しかし今日、世界で働いているのは罪だけではない。墮落した世界に働いている、別の力強いものがある。

キリストの贖いを通して、私たちは神が最初に意図された状態に回復される希望を持つことができる。贖いは何がなされうるかを示すものである。

4. **回復**: 将来いつかキリストは贖いを達成され、世界はキリストのご支配の下で回復される。回復は将来**なる**ことである。

四章の福音について考える時、第1と第4、すなわち**創造と回復**について十分な考えが提示されたか自問自答しているかもしれません。私たちのストーリーの第1章と第4章に、違いをもたらすものは何か？これらの章のドラマの中にこそ、私たちのストーリーのための文脈を見出すのです。神が創造を通して最初になさろうと意図されておられたこと、そして今現在、なしておられることを発見するのです。

創造と回復の意味について理解していなければ、何がなされうか（贖い）について理解するのは不可能ではないにしても、難しいものです。創造と回復についての章だけが、理解する手掛かりとなります。

御国の住人としての新しいいのち

福音によって私たちはキリストにある新しいいのちをいただいています。もはや王に背く生き方はしません。「神聖な謀議（原題 The Devine Conspiracy）」の著者ダラス・ウィラードはこのことを「すでに今ある永遠の**ようないのち**」ⁱⁱと呼んでいます。ウィラードは、神の御国についての良き知らせはすでに手中にあると説明しています。その意味は、御国はイエスを通して、すでに**実働し、用意されている**ということです。これは「イエスの福音」です。私たちは十字架でイエスがなしてくださったことによって赦しを得ましたが、それだけではありません。キリストご自身から直接受けた新しいいのちをいただいているのです。それはキリストの御国の中に住むことであり、キリストのご支配と権威の下にいるということです。コロサイ1:13-14には私たちが移されたことについて次のように書かれています。「神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」

新しいいのちについてはっきりとしたビジョンを持つためには、神が人類に元々どのようなご計画を持っておられたか理解する必要があります。このことを理解したあとで、「主よ、あなたのご計画の中に自分の人生がどのように当てはまるのでしょうか。今日、どのようにしてあなたの御国の中にふさわしく生きることができるのでしょうか。」と問うことができるのです。

「御国のストーリー」は、自分の仕事、召命、ミニストリーについて自分の人生との一体感をもって見始めるために、分析と考察を与えるものとなるでしょう。そして、このストーリーが、自分の人生のあらゆる分野を観察し、意味あるものとするレンズとなっていきますように。

これを読んで次のふたつの質問について考え、教えてください: 1) なぜこの学びは人生全体について、一番うまく説明していると思いますか。2) 他の人たちが自分の人生についての理解するのを助けるために、どのようにしてこの学びを役立たせることができると思いますか。

はじめにの要約ポイント

- 福音は4つの章からなっています: 創造、墮落、贖い、回復
- 福音は、創造から墮落と贖いを通り、回復へと導く神の贖いの歴史である。
- 4つの章は、神ご自身の世界(宇宙)に対するご計画を示しているように、あなたの人生にも文脈を与えるものである。

第1章 — 創造、あるべき姿

読みましょう: 創世記1-2章

創世記の最初の数章とヨハネの黙示録の最後の数章に、神が私たちの新しい人生の中に与えてようとしておられる全体像を理解する助けとなる手がかりがあります。

創世記1-2章を読むと、人間が神、自然、そしてお互いとの正しい関係を持っていたことがわかります。それだけではなく、人間は神から意味のある仕事を任されていたことがわかります。(創世記1:28)

神は創造されたものを良しとされました。人間を神に似せて造られ、良しとされました。神の姿をいただいているゆえ、私たちは創造主に準じています。すなわち、支配し、働き、礼拝し、創造のプロセスを続けているのです。

創世記2:15でアダムは土地を耕すように言われています。耕す(cultivate)ことによって、私たちは文化(culture)を形成していくのです。キール&デリツェックの旧約聖書注解ⁱⁱⁱにはアダムについて次のように書かれています:

地球は人間の手によって耕すものと定められていましたから、アダムは楽園で畑を耕すように命じられていました。人間が手を加えなければ、植物やその他、様々な異なった種類の豆は育たず、野生化してしまうからです。自然に荒廃する中ではやせてしまうしかない聖なる農園は、耕作することによって維持されたのでした。自然は人間のために造られたので、労働によって作物の質を高めることや自分自身に貢献することだけではなく、霊的な領域を建てあげてさらに神の栄光が現わしていくことが、人間に与えられた仕事(召命)でした。

神の姿に似た者とされたアダムの責任のひとつは、農園を開墾し、世話することでした。それだけではなく、彼の働きは庭仕事以上に全世界にわたるものとなりました。アダムとその民族は、世界を耕し、それを神の特別なご臨在の下で価値あるものとしていくようにとデザインされたのです。このようにして文明(文化)が作られていったのです。最初の人間の職務命令が支配することであったことに注目してください(創世記1:28)。創造は、停滞したものとされていたわけではありません。神は完成したものとしてではなく、汚れないものとして、私たちに完璧な始まりを与えられました。創世記から私たちは創造のわざを発展成長させていくように教えられていることがわかります。けれども、一体どこまででしょうか。神の造られた世界(宇宙)はどのようになるべきなのでしょう。

人類は神のご支配の下で世界を発展させていくように望まれています。それによって、神が映し出され、神がほめたえられるためです。また、私たちが神ご自身と神の造られた宇宙を楽しむためです。私たちは樂園に存在していた時と同じような秩序をこの世界にもたらし、パラダイス・メーカーとなるように期待されています。それは神への従順によって適切な統治権を実践することを通してのみ到達できるものです。ダラス・ウィラードは次のように説明しています。

・・・私たちはある適切な領域において「統治権」を持つように造られています。これは神に似たもの・神のイメージとして造られた私たちの内の核となるものであり、私たちが神に形作られた基本となるものです。私たちはみな、神の造られた偉大な宇宙において、良いものとして数えられたユニークな永遠の召し(calling)をもった永遠に滅びることのない霊的存在として造られました。相互責任をもって神と意識的に個人的な関係をもつことができる機能を神が私たちの中に組み立てられたのです。神は私たちと共に行動されるので、私たちが神と一体になることによるのみ、「統治」することが許されます。地上での人生という創造のわざの中で、神はいつも私たちのパートナーとして共にいて、働こうとされたのです。このことを通して、私たちに対する神の愛が実践されているのです。^{iv}

大切なこととして覚えなければならないことは、携帯電話、高層建築物、新聞などが墮落の結果ではないということです。私たちはずっと樂園の中で生きるように意図されたわけではありません。そうではなく、私たちは地球の発展に貢献するように意図されたのです。けれども残念なことに、私たちの住む世界の多くの領域は、神のご性質ではなく、墮落した人間の性質が色濃く反映されています。その結果、神にふさわしいご栄光がもたらされず、神の存在は人類からぼんやりとしたものに映るようになってしまいました。私たちクリスチャンは技術や建築、教育、ジャーナリズムを通して、この世界を発展させてゆく責任をノンクリスチャンに渡してしまったのでしょうか？もしそうならば、なぜこのようにしてしまい、それによってどのような違いが起っているのでしょうか。

創世記1:28に書かれている命令について考えてみてください。神が私たち人間にどのようなことをするように計画しておられたかがわかります。神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

ウィクリフ聖書注解には神がアダムと人類に意図しておられたことについて、次のように書かれています：

彼は神から創造主である神のみこころを行い、聖なる目的を果たすという責任を任せられた代表者で、この地球での管理者です。この世界を治める責任が人類に与えられました。(詩篇8:5-7)彼は地球を治め (*kabash*,「踏みつける」)、人々で満たすようにという神のご計画に従うように命令されました。信じられないほどの特権と重い責任を任せられたこの卓越した人類は、賢い王のように生き、振る舞うべきでした。^v

人類が最初に与えられた職務内容は統治するようということでした。これはまずアダムに与えられましたが、全人類にも与えられたものでした。神に似た者とされたすべての人々は、途方もない特権と重い責任をいただいて、この地球で管理者の役割を担っているのです！何とやりがいのある仕事ではありませんか。このために私たちは造られたのです。これが神に似せて造られたということに続くものです。

では、今日生きる私たちにとって、これはどういう意味でしょうか。あなたは神の管理者としての大きな特権をいただいていること、あなたの仕事は創造主のみこころを行い、聖なる目的を果たす手段であると信じていますか？そして、どの範囲まで？ 被造物に対する人類が持つ影響はどうあるべきでしょうか？バーンズは次のように述べています。

アダムと彼の民族はこの地球と動物王国を支配する力を行使するよう、創造主のことばによって権威が付与されました。征服、支配とは、自分たちの本来的必要を満たすためだけでなく、自分たちよりも劣った動物や同胞の人類に対しても、科学や慈善の様々な目的を果たすためのものです。それは個人の益に留まらず、一般大衆の益のために、知性、道徳的理由によって力を行使するということです。人間による統治は慈善的要素のあるものでなければなりません。^{vi}

人類は地球全体を支配するように神から命令を受けていますが、それは横暴な権威によるものではなく、「人々に益をもたらすもの」でなければなりません。

アダムひとりで地球をよくしていく命令を成就することはできませんでした。神に似せて造られた者全体とアダムの子孫全員にも命じられていることです。墮落の前に与えられたこの命令は、神が世界と人類に元々どのような計画を持っておられたかがわかります。次の章では墮落を取り上げます。そこで罪が神の命令とご計画の成就にどのような影響を与えたかを見ていきます。

創造についての要約ポイント

- 神は創造し、それを良しとされた
- 人類は完全に神に似るものとして造られた
- 創世記1:28は人類に与えられた最初の職務内容が書かれている。支配し、統治することである。
- 創造の時点では、世界は完全であったが、それは汚れないという意味であって、完成したものとなったという意味ではなかった。
- 神はご自分に似た者たちに被造物を育て、発展させていくように願われた。

第2章 — 墮落、現状(今ある姿)

読みましょう：創世記3章

墮落によってもたらされた混乱について考えてください。創世記からまずわかることは、人間と神の関係が破壊されたことです。恥を知らない状況に、恥と恐れがもたらされました。創世記3:9-10には次のように書かれています：神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」

墮落によって人間関係も壊されてしまいました。創世記3:12、13を読むと、信頼が非難に変わったことがわかります。

人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」

創世記3:16は結婚に生じる破綻した関係を表しています。女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」

人間関係にきたした破綻がより鮮明に描き出されているのは、創世記4章にあるエデンの園の後に起こった最初の出来事—カインがアベルを殺したことです。

ついに、地も墮落によって影響を受けた状況になってしまいました。創世記3:17-19にはこうあります。また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」

破壊、苛立ち、死が世界に入りました。人類は神のご支配の下で喜んで生きることはできなくなってしまいました。私たちは罪によって死んだものとなったのです。神の御国は常に存在し、永遠に続くものです。けれども、そこに謀反が生じました。ダラス・ウィラードは御国について次のように記録しています：あなたの王国は、永遠にわたる王国。(詩篇145:13、ダニエル書7:14)それは決して「揺り動かされず」(ヘブル書12:27)完全によいものです。問題が起こったこともなく、これからも起こりません。^{vii}

墮落によって人間と神の関係が破壊してしまっても、支配し、統治するという命令は撤廃されませんでした。事実、洪水のあと、その命令は再度布告されました(創世記9:1-7)。最初に創世記1:28で与えられた職務内容は、そのまま残りました。けれども、そこに敵対する力が働くようになります。私たちは罪によって墮落した世界に住むようになったので、主は新しい方法で私たちの王にならなければなりません。

神は目的を持って創造されたので、人類の墮落に驚かれることはありませんでしたし、それによって神のご計画が妨げられることもありませんでした。罪のゆえに、神は最初に人類に対して持つておられたご計画、立てられた秩序を破棄しなければならないと言うことは馬鹿げています。神は私たちが墮落する前から私たちが墮落するのをご存じでした。そして、世界の創造の前から、私たちの墮落を救うためにご計画を持つておられたのでした。では、神はどのようにして私たちをあるべき姿に戻すことができるのでしょうか。

墮落についての要約ポイント

- 宇宙に存在するすべてのもの、生物、無生物は墮落によって影響を受けた。
- 人間は完全な形に創造されたが、墮落した存在となり、生活のあらゆる分野にその影響が及ばされた。これは神の似姿が消し去られたという意味ではない。損なわれずに残されている部分がある。

- 墮落後も神は人類に創造の秩序を発展させ管理を任せると計画を撤廃されなかった。
- 神は墮落という事態に驚くことはなかった。また、人類と被造物に対して持つておられた計画を破棄することもなかった。

第3章 — 贖い、可能性(なされうる)こと

イエスの生涯、死、そして復活はすべての歴史を変える転換点となりました。救いはキリスト抜きには語れません。旧約聖書に書かれているすべての贖いの行為はキリストを待ち望んでいるものです。けれども、神はイエス・キリストが人類を救う降誕まで待たれたわけではありません。神の贖いの計画はアダムとエバの時から始まっていました。創世記3:21に次のように書かれています。「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」贖いのプロセスが神の御子イエス・キリストによって成就することが備えられていたのです。

神が彼らのために動物の皮を作ったからといって、アダムとエバは救われていませんでした。彼らはいつか女から生まれ、蛇の頭を踏み砕く御子を待ち望むことによって救われました。(創世記3:15)神が衣を着せてくださったことは、神のあわれみ、恵み、罪びとに対する慈しみを伝えたはずです。私たちが信仰によってキリストとひとつになる時のみ、私たちは憐れみ、恵み、慈しみで覆われます。

イエスの生涯、死、そして復活は、私たちの救いに関する限り、中心となる重要な出来事ですが、それには最初も最後もありません。神は歴史の(最初から最後までという)範囲と(連続的な時間という)流れの中でご自身の救いのわざを続々と明らかにしておられるのです。

神はアダムから始まって、ご自身を明らかにしようとしておられます。そして、アブラハム、イサク、ヨセフ、モーセそしてダビデに現れたのでした。神は犠牲と贖罪のシステムを確立されました。そして、イスラエルを整え、訓練されました。預言者も送りました。それからイエス・キリストが到来しました。歴史が進むごとに神の啓示と救いのわざが進められていきました。ガラテヤ書3:7-9を考えてみましょう。ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。聖書は、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていたので、アブラハムに対し、「あなたによってすべての国民が祝福される。」と前もって福音を告げたのです。そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。

ヘブル書11章には、信仰によって神の約束を信じ、待ち望んだ人々の長い歴史が書かれています。その章は39、40節の次のことばで終わっています。この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束のものは得ませんでした。神は私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられたので、彼らが私たちと別に全うされるということはありませんでした。

聖書は、神がご自身の被造物を贖うために働いておられることを記録したものです。アダムからあなた、そして、その先の人々に対して神は贖い続けておられます。イエス・キリストにあって私たちは完全に贖われたのです。彼の方から歴史の中に来てくださいました。そして、その結果、御国は私たちの手に届くものとなったのです。御国の中で、私たちは新しい種類のいのちに近づくことができるようになりました。御国は新しいものではありません。けれども、キリスト

の生涯、死、そして復活によって、御国は今すでに現実のものなのです。

ダラス・ウィラードは「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ3:2、4:17、10:7)という呼びかけについて説明しています。「これは私たちが自分たちの人生をどのように進めているのか、考え直すようにと呼びかけているものです。イエスの御前で、神の永遠の目的のムーブメントに取り囲まれている中で生き、神に自分の人生をお委ねするという選択肢を、私たちがすでに持っている事実と照らし合わせて。」^{viii}

神はすべての被造物、それが墮落において失われたものとなっても、贖おうとしてくださっています。これは、神の贖いのわざは人間の魂だけではないということです。宇宙全体、地球、土地、海、動物王国に対してです。また、芸術や産業、労働と休息に対しても。新約聖書はこのことについて明らかにしています。

パウロはイエス・キリストの贖いのわざについてこう記しています。「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」(コロサイ1:15-20)

エペソ書1:7-10 も見てください。神のご計画の時が満ちた時、天にあるものも地にあるものもすべてひとつにされた」とパウロは語っています。これら「すべてのもの」は、滅ばされるのではなくてキリストにあってひとつにされるのです。

「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであつて、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。」(エペソ1:7-10)

また、パウロがローマ書で語っていることについても考えてください。「今の時のいろいろな苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであつて、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」(ローマ8:18-21)

墮落以来、私たちの支配権—神の創造を補佐する者として土地を耕したりすることによって神のイメージを表現するという人生の領域—の中には、贖いのわざも含まれます。そこには人々も含まれ、それ以上のことも含まれています。私たちがイエスについて知らない人々に福音を伝える時、贖いのわざを行っているのです。また、貧しい人々に食物

を与え、孤児や未亡人を訪問することも贖いのわざに関わっているのです。けれども、これよりもっと贖いに関わる生き方があります。神の本質を現わしていくことによって、私たちの周りの世界を発展させていくことで私たちが贖いのわざを行うのです。主の主権の下にすべてのものを管理し、それによって神のご性質と目的を反映させていくとき、私たちは贖いのわざを行っているのです。

判事や弁護士が行う贖いのわざにはどのようなものがあるか考えてみてください。それは仕事を通して責任を果たしていくことで、正義も憐れみもない法律を変えていくことかもしれません。あるいは、貧しい人々のために弁護士を請求しないで弁護をしていくことかもしれません。このことは、すべてのクリスチャンの弁護士は貧しい人たちにこのように仕えなければならないということではありません。職業を通して、贖いのわざに関わっていくことができるという一例です。そして、もちろん、同僚やクライアント、友人、家族に福音を伝えたいと願うでしょう。

キリストが再臨してすべてのものを新しく回復される時まで、世界は神を完全に反映するものとはなりません。だからと言って、私たちに委託されている統治するという責任が弱められているというわけではありません。一人ひとりが神のご支配の下、置かれている状況下で果たすべき責任があります。私たちは管理するすべてのものにキリストの主権が現わされることを求めています。私たちは自分たちのしていることを通して神に栄光が帰されるよう、また、私たちに関わるすべての人々が、人としてさらに豊かな人生を経験していくことができるよう励んでいるのです。このような行為は本質的に価値あるものです。また、次のような益ももたらされます：神が願っていることを私たちがするなら、私たちは神に栄光を帰すことができ、形作るもの（文化）の中に、人々が神はどのようなお方かについてより知ることができる視点をつくりあげることができるのです。

これが御国の働きです。ウィラードは書いています。「神ご自身のご人格、及びみこころが行われることが、御国の原則を体系づけているものです。これらの原則に従うすべてものは、それが自然派生的なものであれ、自発的な選択によるものであれ、神の御国の中」にあります。」^{ix}神の御国の中で上手に生きるということは、公共の生活の場においても、プライベートな部分においても、私たちはキリストを主として生きるという意味です。

ちょっと待ってください！何かちょっとイエスの存在が薄くなってはいないでしょうか。最後の数ページの学びで私たちは福音の幅を広げて創造と回復を含めました。また、贖いの幅を広げてすべての被造物（創造）を加えました。これはイエス・キリストの十字架上の働きを小さくしてしまうものでしょうか。そんなことはありません。実際、福音が広く捉えられ、贖いの意義が十分に考えられるほど、十字架の重要性は大きくなるのです。

福音：創造と回復を含む広い福音の見方は、なぜ違いをもたらすのでしょうか。

福音の概念に創造と回復を含むことによって、神の目的と私たちの生きている時と空間の中で歴史に起こったことを理解するのに必要な**コンテキスト**を、私たちは得ることができます。福音はもはや「別世界」のものではなく、この世界に対するものなのです。そこには創造を確言する神の世界が明らかにされています。神が人類の墮落して以来、すべての被造物を贖い続けておられることを理解することができるようになります。この理解なしに、私たちの信仰は、個人的な経験に限定され、私たちの住むこの世界の創造の秩序に関わりがあることを見出すのは難しいでしょう。

贖い：人類と創造の秩序の両方に関わっている広い見方で、神の贖いのわざは、私たちの新しい人生をどのように形作るでしょうか。

贖いは十字架を通してのみ可能です。個人的なものです、単に個人の範囲にとどめられるものではありません。イエスは最初に生まれた被造物で、新しい創造の始まりです。キリストにあつて新しい創造はすでに始まったのです。私たちがキリストにつながっているなら、私たちもまた新しい創造にあらかじめ部分的に(でも現実に!)加わっているのです。あらゆるものの回復と刷新は、死から最初に甦られて新しい創造の初めとなられたキリストと切り離すことはできません。キリストが、私たちが終わりの日にしか完成を見ることができない宇宙の贖いの始まりへと導いたのです。

贖いに対する狭義の見方は人間の魂にのみフォーカスし、救いは単に「罪の赦し」にとどまるものでした。この結果、信仰はとても個人的なものとなりました。私は赦されたので、天国に行くことができます。

さらに聖書的に忠実なそして世界を含む救いの見方は、「いのちをいただく」ということとなります。新しい人生をもたらす救いです。単に、再生されるというのではなく、全く新しい生き方をするということです。私たちがキリストのいのちにつながると、現実の世界の中で今までとは違った生き方をするように召されたということです。すべての被造物のために、神の使者として生きるということです。神はご自身の造られた創造の秩序を諦めることはしませんでした。私たちが墮落した被造物から救い出すのではなく、霊的な生活を人類に回復させることによってすべての被造物を救ってられるのです。赦しは救いを可能にしますが、それが最終的な目的ではありません。キリストに結ばれた新しい人生が最終目的です。

福音と贖いの両方の見方を広げていくことによって、私たちが以前とは違う新しい生き方をして救いの目的を果し、私たちの信仰(私たちの信じること)と私たちの働き(私たちのすること)が結び合わされます。私たちがこの世界でいかに生きていくかによって、これはとても大切です。贖いを広く捉えていかないと、私たちの信仰は、私たちの実生活の中で生かされることの少ないものとなってしまいます。私たちが赦しだけに焦点を当てていくと、私たちは天国に入る希望を求めるために生き、他のことは無意味なものとなってしまいます。けれども、私たちのいのちとしてのキリストに焦点を当てるなら、私たちは自分の人生をキリストが生きられたように生きるように求められているという革新的な方向転換に直面することになるのです。ダラス・ウィラードは「訓練の霊(原題: The Spirit of the Disciplines)」の中でのように説明しています:

このことは、信仰は自分たちのまわりに起こる世界の出来事とは関わりのないものであり、単に自分たちの赦しに確証を与えるために必要な内省的なものとして捉える考え方に真っ向から対抗するものです。けれども、新約聖書は「信仰」をそのような単に精神的なものとして捉えていません。新約聖書が教えている信仰とは、ローマ書10:17に書かれているように、神のみことばによってインパクトが与えられ、生きる力となるものです。そして、私たちの肉体、社会的、政治的な環境をも含むあらゆる分野に決定的な影響を与えるものです。^x

私たちがこのように福音や贖いを捉えていくなら、キリストがほめたたえられることとなります。

- ・ 福音を広く捉えていくと、神はご自身のわざを止められないことに気づきます。神は被造物を放棄することではなく、この世界とそこに住む人々を贖うように、最初から計画しておられました。そのためにキリストのいのちと死はどうしても必要なことだったのです。
- ・ キリストの勝利は完全なものとされています。けれども、贖いを部分的に捉える(個人の魂のみが贖われると捉える)なら、あなたはまだ敗北していて、完全に勝利していないということに直面しなければなりません。なぜなら、キリストの死は人類の墮落によって失われたものを回復するには十分でないことになってしまうからです。
- ・ 贖いが十分理解されると、個人的な救いはキリストのいのちをいただくことだとわかります。自分たちの生きる世界に信仰を関らせていきます。キリストのいのちが十字架の死によって曇らされてしまうと、キリストがこの地上に来られたことについて部分的にしか見ることができなくなってしまいます。赦されたことの重要性について認めたとしても、そこからきよい生き方へと導くいのちから切り離されてしまいます。
- ・ キリストのいのちが十字架の死によって曇らされてしまうと、私たちはキリストが与えてくださったいのちについて確信が持てなくなり、いのちの大切さについて正しく理解できなくなってしまいます。ウィラードは神のすべての贖いのわざとしての十字架が間違っただけでなく、「キリストのいのちや教えは贖いのわざにとって本質的なものではなく、キリストの尊い血による犠牲は赦しをもたらすための代価という救いの機能でしかなくなるので、贖いのわざが十字架を装飾するものに過ぎないものとみなされてしまう」と言っています。^{xi}

贖いについての要約ポイント

- 神の贖いの計画は徐々に明らかにされてきた。
- 福音と贖いについての見方が拡大されると、十字架の持つ意味も重要性を増す。
- 神は天と地にあるすべてのものを贖う計画を持っておられる。
- 私たちがまわりの人々、組織、文化を神のご支配の中に戻そうとすることによって、私たちは贖いのわざに関わっているのである。

第4章 — 回復、これからなること

読みましょう: ヨハネの黙示録 21:1-11

最後の章は**回復**について書かれ、聖書のストーリーのあらすじはここで帰結します。ウィクリフ聖書注解はヨハネの黙示録21:1-2を次のように注解しています:

さて、聖書の最後の章にやってきました。これは、何世紀にもわたって神がご自身の民を啓発してきたことが書きとめられている栄光に満ちたクライマックスです。この箇所を読むと、私たちは時間という制限されたものから永遠へと移されます。罪、死、そして神に敵対するあらゆるものは、永遠に消し去られるのです。

この有名な記述は他のどのような古代文学の中に見られるものではありません。それはヨハネが新しい天と地を見るところから始まっています。新約聖書にはふたつのギリシャ語が新しいという言葉に翻訳されて用いられています。それは *neos* とここで使われている *kainos* という語で、「私たちの朽ちたひびの入った古い世界から湧きあがってくる

新しいいのち」という意味です(Swete)。ですから、この箇所は天と地がここで初めて存在したと語っているのではなく、それらは新しい性格を持つようになったと教えているのです。

古いエルサレムが「聖なる都」と呼ばれたように、新しいエルサレムは、正式に神に「聖なる都」として選ばれた都です。この時になって初めて贖われた者たちの住まいという実質的な性格を真に言い表すようになります。神の全きご性質であるきよさに与ることが、神の民が初めから神によって目標としているところでした。私たちの永遠の住まいが旧約聖書においても都と呼ばれていることは、重要なことです。(詩篇48:1, 8;ヘブル書11:16)^{xii}

贖いのプロセスを通して、すべてのものは永遠に神のご支配の下に置かれるようになります。罪は取り去られ、私たちはもともと意図されていたように新しく創造された者として生きるようになります。自分の魂やまわりの世界に対してうめきを感じることもありません。御国には神に敵対するものは何もないのです。

この最後の章で、聖書が帰結しているいくつかの事柄を見ていきましょう。

1. 贖いは完了し、神はご自身の民のためにご自身の目標であるきよさを全うしてくださいました。

キリストの死、復活、昇天は神の贖いのクライマックスですが、贖いのわざの最終的な結末ではありません。これは、創造における秩序は今も乱れ、人類は今も罪と死と戦っている理由です。神の贖いのわざはキリストが再び戻って来られて、すべてのものが新しくされるまで完成することはありません。

確かに、最後の章から、贖いはもたらされたが、完成したわけではないことがわかります。この世にあって、私たちは「すでに起こったこと」と「まだ起こっていないこと」の間、「現実」と「将来起こること」の間で、ジレンマを経験します。

このジレンマのひとつの例は、聖化に見られます。私たちはすでに聖化され、今現在、聖化されつつあり、と同時に、私たちはいつか御国に迎え入れられた日、完全に聖化されるという意味があります。

コロサイ書3章で、このことがうまく書き記されています。1-3節に、私たちはキリストと共に死に、キリストと共によみがえったと書かれています。キリストの死と復活に結び合わされることによって、私たちは実際に罪に死に、いのちにある新しい歩みをするようになったのです(ローマ書6:1-10)。けれども、これはもはや罪を犯すことはないと言っているわけではありません。罪を犯すのを止まらせるものが発生したという意味です。私たちはもはや罪の奴隷となって、その中で抑圧されることはないのです。罪が私たちを支配することはありません。罪に対して死ぬ前の私たちには、罪を犯さずにすむことは不可能でしたが、私たちには正しく歩むことを可能にくださる新しい主人がいます。今や私たちはキリストにあって従順な歩みをすることができます。罪と格闘することがあっても、聖化へと進んでいく側面があります。罪との葛藤は、完全な聖化という側面を取り消すものではありません。

4節には、キリストが現れると、私たちも共に栄光を帯びて現れると書かれています。私たちはすでにキリストと共に上げられましたが、栄光を帯びるのを待っているのです。私たちはまだ栄光を帯びていないのです。10節を読むと、私たちはどのように進むべきかがわかります。パウロは私たちに、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至る新しい人を着るようにと語っています。これはもうすでに為されています。現在でさえ、私たちは新しくされているのです。「私たちの造り主に似せられた」という表現に心を留めてください。私たちは最初だれに似せて造られたのでしょうか。贖いを通して私たちはだれに似せられているのでしょうか。いつかその日に、私たちはだれのイメージを反映させるのでしょうか。

完全な回復が成されたあと、私たちの永遠の状態とはどんなものかウイクリフ聖書注解書を見てみましょう。「神の大いなるご性質を現わすきよさは、神の民に最初から定められた目標です。」

2. 人間の壊された人間関係は回復され、神は願われていたことを実行されます—一人々の心の中に住まわれます。

私たちは墮落のあと、罪が入り込み、人間関係は損なわれてしまったことをすでに学びました。(創世記3:9-16)恥と恐れがアダム、エバと神との関係に入り込んでしまったのです。アダムとエバの間にあった信頼関係は互いを非難するものになってしまいました。これは、自分を欺くものであると同時に、他人を欺いてしまう性質をも表しています。

ヨハネの黙示録19章を読むと、神の民は神の花嫁と表現されています。神は王となって私たちに君臨される存在、羊に対する羊飼いのような存在であるだけでなく、夫と妻の関係になぞらえておられるのです。結婚における夫と妻の関係は、他のどのような関係よりも親密です。その関係は法的に結ばれており、お互いの人生のあらゆる分野に影響し合っています。信頼と愛に基づいた関係です。夫婦はそれぞれひとりよりも、二人ともが連帯することになります。この関係には協力するという要素があります。ひとりの花嫁(神の民)が多くの人々によって成り立っているということは、私たちお互いの関係が癒され、完全に回復されるということを意味しているのです。

3. 最後の日に刷新され、回復されると被造物のうめきはなくなります。ローマ書8章とヨハネの黙示録21章を較べてみてください。

ローマ書8:19-22: 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

ヨハネの黙示録21:1-2: また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

ウィクリフ聖書注解は次のように記述しています。「この箇所は天と地が初めて存在するようになったと教えているのではなく、新しい性質を持つと教えているのです。」

4. 神の御国は決して危険にさらされることはありません。しかし、抵抗する力が働いています。

回復の時、すべての創造の秩序はキリストの王権とご支配の下で完全な回復が行われます。神の御国は再び平和になるのです。

回復の要点ポイント:

- 人生において、私たちはすでにあることと、これからあることの間にある緊張感を体験します。それは、贖いはまだ完成してはいなく、最終的な回復はまだ来ていないからです。
- 最終的な回復が来ると、死も罪も消え去ります。
- 回復の時、創造されたものは、あるべき形になるのを見てください。
- 聖書は新しい天と地が初めて存在するようになるとは教えていません。そうではなく、元々創造された天と地が新しい性質を帯びようになるのです。

結論

人類の歴史は、汚れのない楽園から墮落した都に、贖いと刷新を経て聖なる都へと移っていきました。神が最初私たちに意図しておられたことは、私たちがきよく*なることで、私たちが永遠に住む所は聖なる都と呼ばれています。ですから、私たちの人生や歴史は、この4つの章から成る御国のストーリーの中で進められてきました。これが福音と呼ばれるものです。

このカリキュラムを通して、私たちは、福音の枠組みを用い、私たちの個人的状況また世界の出来事を分析、解釈してゆくことを求め続けるのです。「原状—本来のあるべき姿」「現状—今ある姿」「可能性—なされうること」「将来—これからなること」これらひとつ、ひとつについて私たちは福音のどの章と関わりがあるかすぐ見つけることができます。そして、福音を世界で現実に行っていることに関わらせ、他の人々とどのように福音を分かち合う会話へと導いていけばよいか知ることができるようになります。この読み物に含まれているプロジェクトは、自分の召しや仕事の分析のために役立つものとなるでしょう。

* 新約聖書で使われる「きよい」という言葉は宗教用語ではなく、健康、健全、欠けがないの意味。英語の Wholeness が近い。

The Kingdom Story

- i Christianity Today, Os Guinness Looks Evil in the Eye, Interview, christianitytoday.com, posted March 10,2005
- ii Dallas Willard, *The Divine Conspiracy*, 1998,Harperollins, San Francisco, page28
- iii Keil & Delitzsch Commentary on the Old Testament: New Updated Edition, Electronic Database. Copyright© 1996 by Hendrickson Publishers,Inc.
- iv The Divine Conspiracy, page21 and 23
- v The Wycliffe Bible Commentary, Electronic Database. Copyright©1962 by Moody Press.
- vi Barnes' Notes, Electronic Database. Copyright © 1997 by Biblesoft.
- vii *The Divine Conspiracy*, p25
- viii *The Divine Conspiracy*, p15
- ix *The Divine Conspiracy*, p25
- x Dallas Willard, *The Spirit of the Disciplines*, paperback, 1991. HarperCollins, San Francisco, p41.
- xi *The Spirit of the Disciplines*,p36
- xii The Wycliffe Bible Commentary, Electronic Database. Copyright©1962 by Moody Press.